ワールドカップよりも「ゲーム実況」

旭川市医師会
市立旭川病院
武井　　明

この夏、ロシアで開催されたサッカーのワールドカップの試合を深夜までテレビで観戦していた方が多かったのではないだろうか。この時期に精神科思春期外来を受診した中高生に、ワールドカップを観たかと尋ねてみると、ほとんどの子どもたちは観てないと答えた。彼らの大半が不登校であり、社会の動きから距離を置いて生活しているので当然なのかもしれない。

では、そんな子どもたちは家にこもって何をしているのであろうか。最近では自分でゲームをするよりも、スマホの動画で「ゲーム実況」を観ている子どもたちが多い。他人がおもしろおかしく解説しながらやっているゲームを動画で観るわけである。「ゲーム実況」に子どもたちが夢中になる理由として、自分が大好きなゲームを行っている人の反応やコメントを観るのが楽しいことや、自分ではできない上手なプレイを観ることができることなどあげられるが、果たしてそれだけだろうか。

不登校のため、生活の大半を自室で過ごす子どもたちが、自分一人で行うゲームよりも、“他人”が行う「ゲーム実況」を好むという点に注目したい。思春期外来の子どもたちの中には、学校での人間関係で傷つき裏切られ、登校できずに自室にひきこもっている子も少なくない。そのような子どもたちが「ゲーム実況」を好むということは、彼らが完全に人間を嫌って避けているわけではないことを示していると思われる。「ゲーム実況」を真剣になって観ることで、自分もプレイヤーになりきったようなある種の一体感が生まれるのではないだろうか。彼らはその一体感を強く求めているような気がする。そういえば、サッカーや野球などのスポーツ観戦も同じかもしれない。観戦することで、自分ができるはずもないプレイをする選手たちとの一体感が生まれ、観戦者側に気持ちの高揚や興奮がもたらされる。

不登校の子どもたちは、学校では部活にも入らず、学校行事にも参加せず、他人と一緒に行動するという経験が乏しい子どもたちばかりである。それゆえ、彼らは他人との一体感が得られる何かをいつも求めており、身近にあるスマホで観られる「ゲーム実況」がそれを可能にしたと考えることができる。しかし、「ゲーム実況」から現実世界での人と交わりに至るまで道のりは相当な距離がある。これからも診療室で子どもたちが語る「ゲーム実況」のすごさに耳を傾け、子どもたちが現実世界に向かう長い道のりを応援したいと思う。

病院朝食はコンビニサンドで

札幌市医師会
北海道がんセンター
加藤　秀則

病院管理・経営に関わる医師のほとんどが医師・看護師の確保と配置、診療業務の諸問題、患者確保などなどの共通した問題を抱え、どれも悩ましいものばかりでしょう。従来のそういった諸問題に加え、新しい病院経営の問題が当院で起こりました。病院給食の問題です。中規模以上の多くの病院がそうだと思いますが、昔は自院で調理師を雇用し患者への食事を調理していた時代から、業務委託をする時代へと変化し、特に私たちの属する国立病院機構は、診療以外の病院業務はなるべく外部委託する方針を掲げてきました。ある日、朝食業務にくるはずの８人が定数通り来なくなり、朝食を供給できなくなる危機に直面しました。委託先の人員不足と管理の悪さが原因でした。救急処置以外は実は医療は待てることが多く、抗生剤が切れたので半日待ってくださいとか、定期の手術を１日延期するなど多くのことが時間調整可能です。ところが、患者にとっての食事だけは、実は中止したり延期したりできないもので、医療行為以上に供給できないことが、ある意味深刻になるのです。

このようなことは全日本病院協会などの情報では全国的な問題となりつつあるようです。なぜなのでしょうか？　一つは食品衛生に関わる法の制約で、例えば前日に調理しておいたものを翌朝給仕することはできないため、早朝４時30分に調理員は出て来なければならず、仕事を辞めてしまいます。前日に準備ができれば６～７時でいいはずです。適温・適時といった規約もあるようです。なぜ夕食を18時に温かく出さなければならないのでしょう？　働き方改革が叫ばれる中、残業を助長します。勤務時間内の15時に作って17時に出して帰ってもいいのではないでしょうか。さらに大きな要因は、日本の労働者不足です。飲食業・建設業などは圧倒的な人手不足です。介護の分野では最近政府は東南アジアからの大量の就労移民を受け入れることにしたようです。そのようなことが病院給食にも起きることは必至でしょう。すでに外人労働者を雇用している給食会社もあるそうです。ある病院経営のセミナーで、「朝はパンと牛乳にしてしまいましょう。コンビニのサンドイッチなんかでも上出来ではないでしょうか」という意見が出ていました。本当にそれを実行する時代が来ています。